

## 〈校内研テーマ〉

## 互いに学び合う授業の創造

～ 聴き合い・かかわり合い・支え合う授業づくりを通して ～



3年 算数科 《主事招聘授業》

授業者：YR先生

単元名：かけ算のひっ算（1）大きい数のかけ算のしかたを考えよう

令和2年度、本校には5年経年研の3名の教諭がいる。1学期にはON先生の道徳科の授業研究が実施された。本日は、5年経年研研究授業の2回目である。新型コロナウイルス感染症禍のなか学校における授業の形態もソーシャルディスタンスを考慮した形態を余儀なくされる。3年生16名の児童の学びを主事2名を含めた12名の参観者が見守る。本校には授業改善アドバイザーの教諭と通級指導教諭の2名の加配の教諭が配置され、通常は3名の教師で1コマの算数の授業の運営にあたっている。本日は、授業改善の先生をT2とし、担任のYR先生が学級の子ども達全員をあずかり学び合う授業への挑戦である。

## 〔あまり語られないT2の役割〕



一つの授業に2名の先生がいる。子ども達はこのことをどのように受け止めているだろう。子ども達に不安や戸惑いを感じさせてはならない。授業者で役割を確認し二人の先生がいることのメリットを最大限に有効化させたい。そのためにもしっかりした打ち合わせが必至になる。本日、T2の教師は、授業演出の黒子となって板書、資料の配布、見守り、子どもの支援に徹した。T2の使命として、授業前の教材研究から授業運営



のT1の先生の進行を支えるほか、つまり子ども達の支えにもならなければならない。T2がいることの有効性を生かすためにも授業におけるポジショニングは絶対に曖昧であってはならない。T2の有効性はT1よりも子どもたちに還元されなければならない。つまり二人の教師のいることが子ども達にとってどうであったかが問われる視点が必要である。

## 〔教師も子どもも学ぶ校内研〕



教室を開く教師の使命がある。「公」であることの意味がある。本日の校内研も久しぶりの開催で、ほとんどの職員が参観した。同僚の授業から学ばせてもらう。子ども達の姿から学ばせてもらう。授業公開する授業者には常に感謝の念を抱き敬意を表したい。他校からも2名の参観者があった。国頭村ならではの事情がある、他地区から赴任された先生方にはご理解を頂く。国頭村で学ぶ



「すべての教師に学ぶ機会」が提供される。パブリックであることは同時に「開かれていなければならない」ことが条件となる責任を負う。国頭村教育委員会の計らいで村内の交流校内研修が行われている。他校からもどん欲に学びたい先生方の主体的学びが多くの教師たちに還元される。

## 〔コロナ禍の授業〕

『予測が困難な未来』とは、世界教育学会から提言された言葉であるが、2020年世界を混乱させる新型コロナウイルス感染症は学校授業の在り方まで変えてきた。全員がマスクを着用し、ソーシャルディスタンスで仲間との距離を置くことを余儀なくされる。仲間に「訊く」ことが困難になり、弱い子どもたちが授業中に戸惑うことになる。さて、この疫病による世界の混乱を誰が予測していたでしょうか。先進国、途上国も関係なく経済や流通、人と人のつながりまでも躊躇せざるを得ない世界の状況下である。世界教育学会の提言においても、まさか学校授業の在り方まで変えさせられるとは、まさに予測していなかった事態ではないだろうか。しかしその「まさに、まさか」に負けていないのが日本の学校現場での教師達である。様々な工夫やアイデアで子ども達の学びの保障へ向かっている。5月の臨時休校明けに子どもがつぶやいた言葉がある「やっとみんなと会えた」この思いを大切に育てていきたい。

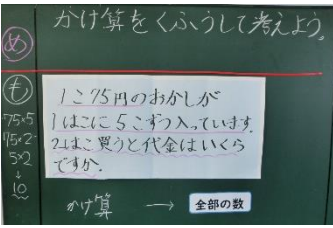


フェイスシールド



ソーシャルディスタンス

[本時の課題] 本時の課題が提示され、全員で一読する。



K:「わかっていること。求めることは何ですか？」  
K:「これまでの問題と何がちがう？」→ペアへ  
K:「求められそう？」→ペアへ  
K:「どうしてかけ算だと思うの？」→ペアへ  
K:「どんな工夫ができそう？」→ペアへ

教師の柔らかな言葉と表情に子ども達が反応する。ペアで話したあと、自分の言葉で教師に伝える。発表するという営みとは違い、子どもの「つぶやき」を教師が拾い「つなげる」という行為である。右写真①、何度か問いをペアに下すが対話が進まないペアへケアに入る。「分からない」で困っている子を仲間に「つなぎ」学習への参加を促す行為、授業者の低い姿勢と距離感が大切である。



授業開始から5分、授業者は、5回ほどペアへ問いを下ろし子どもの声を整理しながらめあてを設定した。



写真①

[授業をデザインする]

10:50 子ども達の対話に滞りを感じた授業者はもう一度問題文の確認を入れる。



K:「ちょっと困っているお友達がいるみたい、みんなでもう一度確認してみようか。」→ 求める数、75、5、2の数の確認

K: 75、って何 → 男の子: お菓子の1個の値段

K: 5、はなに → 女の子: ひと箱に5個入ってる

K: 2、はなに → 女の子: ふた箱

K: この数を何とか上手にを使って、式にできないかな? ペアで相談してみて。

指導案は、教師の予測の検証である。つまりプラン(予定)である。しかし子ども達の反応は教師の予測と一致するとは限らない。この時、教師は柔軟に授業の再構築を図る必要がある。この授業の編み直しのことを「授業をデザインする」という。プランはあくまで教師の予定であり、さらにやってみないと分からない部分や、予測が困難な状況が必ず起こるものである。教師の授業運営が自分のプランをやり遂げることに重さが置かれると、子ども達の反応や表情が無視され「この授業がだれのためのもの」であったかがグレーになる。授業者が子ども達の「困り感」、「分からない」を察して編み直していく授業、子ども達と一緒に考えて創造する授業こそが主体的な授業になるのではないだろうか。

本日の授業者の判断は正しい。時間は費やしたがそのおかげで子ども達の思考は活性し、その後のペアの対話も単なる「確かめ」や「確認」のためではなく、課題解決のための的が絞られた対話になった。

[子どもの思考を整理する]

子ども達の考えを授業者が整理し、分かりやすく解説・確認するときである。つまり解決に至るプロセスの思考の整理である。本日は結合法則で計算が簡単になるという算数の合理性を追求したものであった。教師が「分からせたいこと」を書かせる時間ではない。

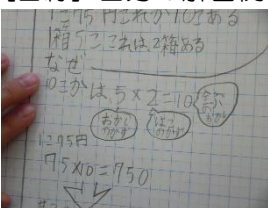


[1枚の写真]

「学び合い支え合う授業」風景のモデルとしたい。



[目線] 自分の解答例が上げられ両手合わせて見守る目線。友達ノートを見つめる目線(沈黙の学び)。



3人の見つめる先には授業者。しっとりした目線で話に食い入る子ども達。

[千葉主事より]

ペア活動に入る前のコンパクトな指示の仕方がよかった。何のためにペアにするのか明確になっていた。ペアによる協同解決にこだわり、単なる答え合わせやノートの見せ合いに終止することなく。「( )の意味は何だろうか?」、「なぜ、10を使った方がいいのか?」など、思考させるためのペア活動になっていた。国頭村でしか見られない素敵な授業デザインでした。(国頭学びの会ゆい)

